(66)

氏名(生年月日)	吉田克己（ヨシダ カツミ）
本籍	
学位の種類	医学博士
学位授与の番号	乙第711号
学位授与の日付	昭和60年3月15日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当（博士の学位論文提出者）
学位論文題目	**胸部食道癌術後再発に関する臨床的研究**
論文審査委員	（主査）教授　遠藤　光夫
	（副査）教授　小幡　裕，教授　福山　幸夫

論文内容の要旨

研究目的

胸部食道癌の手術成績は，術式の改良，術中術後管理の向上により，手術死亡率5％以下と著しい改善がみられるが，術後遠隔成績を考えると，5年生存率23％と，他臓器のそれに比し，可成不良である．遠隔成績向上のためには，再発癌といえども早期に発見し，治療を行なうことが必要であると考え，臨床的に種々の検討を加えてみた．

対象および方法

対象は，東京女子医科大学消化器病センターにて1965年2月より，1982年12月までの間に，原発性胸部食道癌切除術を受け，術後再発をきたした症例で，入院又は外来治療を受け，経過観察し得た261例である．この内，剖検例は83例である．方法は，臨床ならびに剖検所見から，再発形式を，(1) 頚部上縦隔リンパ節再発，(2) 腹腔内リンパ節再発，(3) 肝転移再発，(4) 肺転移再発，(5) 骨その他の臓器再発，(6) 局所縦隔再発，(7) 断端再発，(8) 胸膜腹膜播種性再発に分け，再発形式と各因子（術式，占居部位，進行度，外膜浸潤，リンパ節転移，組織型，脈管侵襲，再発時期），再発の診断，再発の治療について検討した．

結果及び考察

再発形式の頻度は頚部上縦隔リンパ節再発67例，腹腔内リンパ節再発16例，肝転移再発34例，肺転移再発20例，骨その他の臓器再発10例，局所縦隔再発72例，断端再発22例，胸膜腹膜播種性再発20例であった．頚部上縦隔リンパ節再発は，外膜浸潤が少く，リンパ節転移の少い，比較的早期で，治癒切除できたと思われる症例にもみられる再発形式と思われた．平均再発時期は1年5ヵ月で，他の再発形式に比べ遅く起った．

再発形式別特徴を参考にし，X線検査，腫瘍シンチグラム，CTスキャン，超音波断層撮影等を定期的に行い再発の診断を行なった．

超音波断層撮影で腹腔内リンパ節再発は56％，肝転移再発は83％診断できた

再発の治療は再発形式により多少特徴をもって行ない，治療効果が認められた．

結語

胸部食道癌の術後再発形式と頻度は，頚部上縦隔リンパ節再発，臓器再発，局所縦隔再発がそれぞれ25～27％と多くを占めていた．

頚部上縦隔リンパ節再発は比較的早期と思われる切除例にもみられ，又再発時期は平均1年5ヵ月で，臓器再発，局所縦隔再発に比べ遅くみられる傾向であった．

再発例でも治療を行ない得たものに再発後生存期間の延長がみられ，早期に治療を開始し得たものに，より延命効果をみた．

論 文 審 査 の 要 旨

本論文は胸部食道癌術後再発例261例を再発形式別に分類，再発形式と各因子との関連について分析，さらに再発癌の早期診断，治療による延命効果についても検討を加えたものである．

胸部食道癌術後遠隔成績を向上させるための集学的治療の一指針となるもので，学術上価値あるものと認める．

主論文公表誌

胸部食道癌術後再発に関する臨床的研究
東京女子医科大学雑誌　第54巻　第12号
1296～1313頁（昭和59年12月25日発行）

副論文公表誌

1）EF-PII（短型 GIF-PII）の使用経験
Progress of Digestive Endoscopy　11 43～45（1977）

2）消化器手術におけるパントシンの使用経験
薬理と治療　2（9）137～140（1974）

3）食道再建術術後吻合部狭窄に対する内視鏡的切開拡大術について
Gastroenterological Endoscopy　20（4）359～363（1978）

4）食道良性腫瘍に対する内視鏡的ポリペクトミーの検討
Gastroenterological Endoscopy　20（3）217～221（1978）

5）膵管直接ドレナージによる後腹膜十二指腸破裂の1治験例
手術　XXXVI（3）371～374（1982）

6）胃癌に併発した特発性食道破裂の1治験例
外科　43（8）875～879（1981）